広島大学附属三原学校園研究紀要　第６集　2016　pp. 69-74

国　語　科

読むことを楽しみ，物語の意味を見出す国語科の学習

—第３学年　「わにのおじいさんのたから物」の実践を通して—

杉　川　千　草

１　はじめに

21 世紀における社会の変化に伴って，これからの時代を生き抜くために求められる資質・能力をどのように身に付けていくのかかが問われるようになってきた。これらの資質・能力は，言葉が基盤になっており，国語科で育成する能力と大きくかかわっている。本学校園でも，「通教科的能力と関連的に育む国語科の本質に根ざした資質・能力」を「キャリアプランニング能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」の三つの観点から整理して実践を試みた。その中で，物語の読みにおいて，他者の読みとの交流を経て，子どもたちが物語をどのように意味づけていくのかを探ってみたいと考えた。

２　研究の構想

(1) 文学の読みについて

現在担任している３年生の子どもたちは，保護者や教師の読み語りに夢中になって聞き入り，図書の時間などの自由読書を楽しみにしている。このような子どもたちが，国語科の授業の中で文学を読む意味について考えてみることにした。

山元は，文学の読みの働きを，基本的に「楽しみのために読む」「知るために読む」という二つの側面に分け，次のように述べている。「楽しみのために読む」という側面は，読者の側の感情や情緒に深くかかわる。文学を読んで自己発見をしたり，他者の理解にいざなわれたり，世界認識の方法を手に入れたりすることは，いわば文学作品を「知るための」ものとする営みである。「知るために」読むこと「楽しみのために」読むこととはつねにどこかで結び合っているのであり，「知る」ことが「楽しみ」を導き，「楽しみ」が「知る」ことを導くという関係を，学習指導の中で作り出していくということが重要なのである。そのような関係を作り出していくということが文学を通して〈ことばの学習〉を営んでいくことであり，子どもの〈ことばの力〉の発達をはぐくんでいくことなのである[1)]。

そこで，本実践では，「楽しみのために読む」ことと「知るために読む」ことをつなげることによって，物語の意味づけをさせたいと考えた。

(2) 読むことを楽しみ，物語の意味を見出すために

読むことを楽しみ，物語の意味を見出すために，次のことに留意した単元構成を行う。

①作品との出会いを大切にする

子どもたちが読むことを楽しむためには，言葉への興味・関心を引き出し，課題意識や目的意識をもたせることが大切である。単元のはじめに，学習に対する興味や関心を高め，疑問や課題意識をもたせることによって，学習意欲を喚起する。そこで，教材文を提示する前に，登場人物や題名からイメージを広げたり内容を予想したりすることによって，子どもたちの興味・関心を引き出して読みの課題意識をもたせ，学習に主体的に取り組めるようにする。

また，原作にふれさせることによって，登場人物の人物像を明確にし，物語をより立体的に楽しませるようにする。

②他者の読みを生かす

読みは一人ひとりそれぞれ異なり，最終的には

自分に返るものである。そこで，まずは一つひとつの言葉から感じたことや率直な疑問などを書き込むことによって，自分の考えをもたせるようにする。そして，それらを交流することによって，お互いの読みを広げ深め，課題解決を図ることができるような授業づくりをしていく。授業の終わりには，「なるほど」と思った友だちの考えを書き留めさせることによって，他者の言葉から学んだことを意識化させ，自分の読みの変容を確かめさせるようにする。このような学習を繰り返し行うことによって，他者とともに学ぶことのよさを実感させるようにする。

③読み取ったことをもとに続き物語を創作する

子どもたちは，与えられた読みではなく，自ら考え自ら表現することに楽しさを感じる。そこで，読むことの学習の発展として，それまで読み取ってきたことを生かして，続き物語を創作する活動を位置づける[2)]。子どもたちがつくった続き物語の中には，登場人物の人物像や言動に，これまで一人ひとりが物語をどのように読み，意味づけを行ってきたかが反映されるであろう。また，続き物語を書くために，物語を細かい部分まで再度読み返すことも必要になってくる。再読することによって，物語の新たなおもしろさや意味に気づくことも期待できる。

これらのことが読むことを楽しみ，物語の意味を見出すことにつながると考える。

3　実践

(1) 単元名

おもしろさをくらべよう（学校図書三下）
「わにのおじいさんのたから物」（川崎　洋作）

(2) 授業の構想

①単元について

わにを見るのも初めてで，たから物という言葉さえ知らないおにの子が，わにのおじいさんと出会い，たから物をさがしあてる様子が描かれた物語である。わにのおじいさんからたから物を託されたおにの子は，やっとたどり着いたがけの上の岩場に広がる夕焼けをたから物だと思い込むが，最後にどんでん返しが仕掛けられた形で物語が終わっている。文章は，純真無垢なおにの子と年取ったわにのおじいさんとのやりとりがユーモラスに描かれており，子どもたちはおにの子に寄り添いながら先を読み進めることができるであろう。ここでは，初読の段階での率直な読みから作った問いを大切にしながら，物語のおもしろさを見つけ，「わにのおじいさんのたから物」が何かを考えることによって，物語をいろいろな観点から豊かに読む楽しさを味わわせるように考えた。

指導にあたっては，まず，作品が収められている「ぼうしをかぶったオニの子」（あかね書房）を紹介することによって，「おにの子」についてのイメージをもたせ，物語の世界に浸らせるようにした。また，初読の段階での感想や疑問を生かしながら学習課題を作ることによって，子どもの思いを生かした流れで単元全体を見通しながら学習を進めていくことができるようにした。内容の読み深めの段階では，わにのおじいさんとおにの子のやりとりから醸し出されるユーモアや最後の場面の展開から，物語のおもしろさを見つけさせるようにした。さらに，「わにのおじいさんのたから物」は何か考えたり物語の続きをつくったりすることによって，題名の意味や物語のテーマなどいろいろな観点から作品を豊かに読む楽しさを味わわせるようにした。

②目標

○　いろいろな観点から物語を読む楽しさを味わうことができるようにする。
○　課題意識をもち，登場人物が心を通わせていく様子を叙述にもとづいてとらえることができるようにする。
○　登場人物のやりとりから物語のおもしろさを見つけ，「たから物」の意味を考えることができるようにする。

③学習計画（全 12 時間）

第１次　「ぼうしをかぶったオニの子」を読もう　・・・２時間

第２次　「わにのおじいさんのたから物」を読もう　・・・５時間

第３次　物語の続きをつくろう　・・・５時間

(3) 授業の実際（Ｓ児の記録を中心に）

〈第１次　「ぼうしをかぶったオニの子」を読もう〉

①第１時　「かくれんぼとカカシ」を読もう

「わにのおじいさんのたから物」は「ぼうしをかぶったオニの子」（あかね書房）に収められている二つ目の物語である。主人公は，一般的な鬼のもつイメージとは異なる，一人ぼっちで心優しいおにの子である。

そこで，教科書の本文を読む前に，おにの子が登場する物語の世界に触れさせ，人物像を明確にするために，鬼についてのイメージマップを書かせた。子どもたちからは，「強い」「こわい」「おそろしい」などの言葉が出された。

次に，原作の「ぼうしをかぶったオニの子」という題名と「ぼくオニの子　ぼうしかぶれば　ふつうの男の子　ぼくひとりぼっち」という序文を提示し，どんなおにの子だと思うか想像させた。子どもたちからは，

- 角がないことが恥ずかしくて帽子をかぶっているのではないか。
- 人間の子どもみたいになりたいから，角をわざと隠しているのではないか。
- 人間の子どものふりをして，仲良くなりたいのではないか。

などの意見が出された。

表１　通教科的能力と関連的に育む国語科の本質に根ざした資質・能力

通教科的能力	人間関係形成・社会形成能力	キャリアプランニング能力	課題対応能力
教科の本質に根ざした資質・能力	**言葉や文字などによって，意思や感情などを伝え合いコミュニケーションを成立させることができる。（コミュニケーション能力の基盤を成す国語の運用能力）**	**価値観・感性・情緒等の基盤を成す言葉を使いこなすことができる。（語彙力）よりよく聞こう，話そう，読もう，書こうとすることができる。（言語生活の向上を志す意欲・態度）**	**問題を解決しようとする思考力を身に付け，様々な資料を基に将来の状況やあるべき姿を予測し，見通しをもって行動することができる。（論理的思考力・想像力の基盤を成す国語の運用能力）**
具体的な姿	登場人物が心を通わせていく様子や「たから物」についての自分の考えを交流している。	物語のおもしろさを見つけたり，「たから物」についての自分の考えを深めたり，読み取ったことを生かして物語の続きをつくったりしている。	課題意識をもち，課題解決に向けて言葉にこだわりながら物語を読んでいる。
指導の手立て	本文を根拠に，学習課題についての自分の考えをもたせる。 他者の考えとの相違点を見つけながら，交流させる。 授業の中で他者から学んだことを，書き留めさせる。	おにの子とわにのおじいさんのやりとりの様子から，物語のおもしろさを見つけさせる。 「わにのおじいさんのたから物」は何かを考えさせる。 題名の意味や物語のテーマについて考えさせる。 学習したことを生かして物語の続きをつくらせる。	初読の段階での感想や疑問をもとに学習課題をつくらせる。 大まかな学習計画をつくり，見通しをもって学習を進めさせる。 学習課題にもとづいて，言葉にこだわりながら，内容を読み取らせる。
評価方法等	授業観察やワークシート，振り返りの記述	授業観察やワークシート，振り返りの記述，物語の続き	授業観察やワークシート，振り返りの記述
期待される主体的な学びへの効果	他者から学んで自分の考えを広げたり深めたりしたことを，意識化することができるようになる。	物語をいろいろな観点から豊かに読む楽しさを味わうことができるようになる。	課題意識をもち，課題解決に向けて言葉にこだわりながら，物語を読むことができるようになる。

その後，一つ目の物語である「かくれんぼとカカシ」を冊子にして読ませ，主人公のおにの子をどう思うか，自分の考えを書かせた。

> わたしは，オニの子はきれいな心をもっていると思いました。わけは，最後の場面で，カカシの気持ちを理かいして，カカシのまねをして，カカシでもできる遊びを考えたからです。人のことも考えて行動できるのですごいなと思いました。　（Ｓ児）

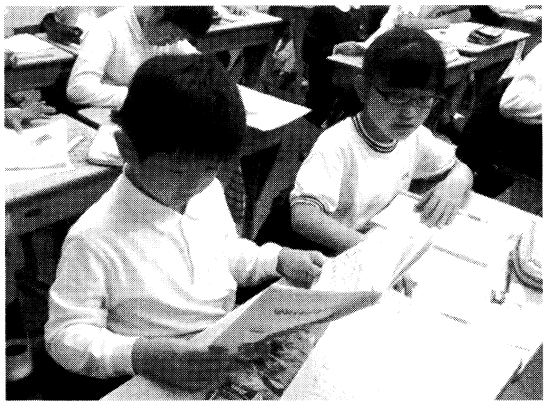

図１　「かくれんぼとカカシ」を読む

②第２時　感想を交流しよう

本時は，前時に書いた感想とその理由を交流させた。子どもたちからは，「かわいそう」「さびしそう」などおにの子が置かれている境遇についての感想と，「やさしい」「思いやりがある」などおにの子の行動についての感想が出された。

交流後，おにの子の人物像として，

> ・心がやさしい。
> ・ぼうしや角のことを気にしていない。
> ・自分より相手のことを考える。

ということが確認された。

最後に，交流をとおして「なるほど」と思った友だちの考えや新たに学んだことや考えたことを書いて，授業を終えた。

> オニはおそろしいイメージがあるけれど，オニの子はやさしい。表情がゆたかで，力ではなく心が強い。それは，思いやりがあったからだと思います。　（Ｓ児）

〈第２次　「わにのおじいさんのたから物」を読もう〉

①第１時　「わにのおじいさんのたから物」を読もう

「わにのおじいさんのたから物」の本文を読む前に，「たから物」の意味を考えさせた。すると，子どもたちから「自分にとって大事なもの，大切なもの」「自分にとって大切な人からもらったもの」「ねうちがあるもの」「ほかの人に知られたくないもの」などが出された。

次に，「わにのおじいさんのたから物」という題名と，わにのおじいさんの挿絵を提示して，わにのおじいさんのたから物は何だと思うか想像させた。子どもたちからは，

> 王かん　ルビー　目　命　家族　まご
> 友だち　仲間　思い出　夕日　海

など，さまざまな意見が出された。

その後，教科書の本文を読み聞かせた。子どもたちは，「わにのおじいさんのたから物は何だろう。」という疑問をもちながら聞いていたが，物語の結末で宝物の正体が明かされなかったことに思わず「えーっ！」という声を上げていた。

授業の終わりに，物語についての感想と，不思議に思うことや疑問，みんなで学習したいことを書かせた。

> どうしてたから物の正体を明かさなかったのか。それは，たとえ作者にでも，わにのおじいさんはたから物の中身を知られたくなかったからだと思います。最後にわにのおじいさんはどうなったのか。予想では，永いねむりについたと思います。
> わにのおじいさんは，自分の体にいちばんよくにた岩の中にたから物をうめたんだと思います。おにの子に葉っぱをかけてもらえて，冬でもあたたかくてうれしかったんだと思います。おにの子がかわいかったです。　（Ｓ児）

②第２時　学習計画を立てよう

次の時間は，前時に書いた感想をプリントにまとめて交流させた。その後，みんなで学習したいことを整理して，次のような全体の学習課題を決めた。

> ○わにのおじいさんは，なぜおにの子だけにたから物のありかを教えたのだろう。
> ○わにのおじいさんの本当のたから物は何だろう。

さらに，本文の読み取りの後，「続きの物語をつくる」という大まかな学習計画を立てた。

③第３時　学習課題について考えよう１

本時は，「わにのおじいさんは，なぜおにの子だけにたから物のありかを教えたのだろう。」という学習課題について考え，１～３場面の内容を読み取った。

④第４・５時　学習課題について考えよう２

４場面の内容を読み取るにあたって，まず，おにの子がたから物を見つけることができたかどうか考えさせ，そう思った理由を書かせた。

> おにの子は，たから物を見つけることができたと思います。おにの子の中では，夕やけがたから物だと思います。わにのおじいさんのたから物は岩の中にうまっていて，おにの子はまだ小さいので，今自分が見たものがたから物だと思いこんでしまったんだと思います。（Ｓ児）

次の時間は，おにの子はたから物を見つけることができたかかどうか，それぞれの考えを交流させた。「見つけることができた」という立場の子どもは11名，「できなかった」は19名，「おにの子は夕やけをたから物だと思っているが，わにのおじいさんのたから物は見つけることができていない」という立場の子どもは２名だった。お互いの意見を交流し，わにのおじいさんの本当のたから物とは何か考えさせた。その中で，「たから物は『もの』ではないのではないか。」などの意見が出され，まとめを書かせて授業を終えた。

> わにのおじいさんのたから物は見つからなかったけど，おにの子のたから物は見つかったんだと思います。わにのおじいさんはおにの子にたから物をつくってほしかったんだと思います。たから物を見つけられなくても，おにの子がたから物をつくる方が，よっぽどうれしかったということがわかりました。（Ｓ児）

図２　お互いの読みを交流する

〈第３次　物語の続きをつくろう〉

①第１時　続き物語をつくる準備をしよう

第３次では，これまで読み取ってきたことを生かして続きの物語をつくることにした。まず，それぞれの登場人物にとっての「たから物」について次のように整理した。

> おにの子にとってのたから物
> 「世界中でいちばんすてきな夕やけ」
> わにのおじいさんのたから物
> 「おにの子が立っている足もとの箱の中にある物（何かはわからない）」

また，これまでの物語を振り返って，わにのおじいさんがおにの子に伝えたいこととして，

> ・自分のたから物をつくってほしい。
> ・たから物がどんなものなのかを知ってほしい。
> ・自分が見つけたたから物を大切にしてほしい。
> ・ここまでがんばった苦労や勇気もたから物だよ。

ということを確認した。

②第２～５時　続き物語をつくろう

これまで学習したことをもとに，「おにの子がわにのおじいさんの所に帰って，たから物の報告をした時のやりとりを必ず入れる」ことを約束として，続き物語を書かせた。

> おにの子は，朝になるまで夕やけを見ていました。やがて，太陽が出てきたころ，おにの子はわにのおじいさんのいるところまで帰りました。朝だったのが昼になり，夜にかわり，また朝になったころやっとわにのおじいさんのもとにたどり着きました。
> わにのおじいさんはむあっと口を大きく開き，「ああ，君かい。たから物は見つかったかい。」と言いました。「うん，見つかったよ。だけど，持って帰れなかったんだ。」「ああ，それはざんねんだったのう。」「でもね，とーっても美しい夕やけがいっぱいに広がっていたんだ。」「そうかい，よくがんばって行ったかいがあったのう。じゃあそれは君の宝物じゃよ。」とわにのおじいさんは笑顔で言いました。「わーい。わーい。あのすてきな夕やけはぼくのたから物。世界一のたから物。」とうれしそうに言いました。「決めた！わしのたから物はこのやさしいきれいな心をもった君じゃ。」ときっぱり言いました。（中略）
> そして，わにのおじいさんとおにの子はゆめを見ました。いっしょに美しい夕やけを見るゆめです。（後略）（Ｓ児）

4 考察

(1) 作品との出会いを大切にする

今回の実践では，教科書の本文を読む前に，登場人物や題名から内容を想像させ，本文と比べさせるようにした（第１次第１時，第２次第１時）。自由に想像することで楽しさを感じさせ，イメージを広げたり内容を予想したりすることによって子どもたちの興味・関心を引き出すことができた。特に，「おに」についてのイメージを出し合ったり「たから物」の中身について予想したりすることは，登場人物の人物像をつかんだり主題を読み取ったりする時の視点となり，読みの構えをつくることにつながった。また，教科書の本文を読む前に原作にふれさせたことで，おにの子のやさしさの背景にあるものも読み取ることができ，その人物像のとらえも終始ぶれることがなかった。

(2) 他者の読みを生かす

学習課題についての読み取りの時間には，授業の終わりに「なるほど」と思った友だちの考えを書き留め，学習をとおしてわかったことや考えたことをまとめさせるようにした。その結果，32名全員が「発表や話し合いをして，よかったことや学習に役立ったことがある。」と答えている。その理由として「自分とは違う意見を聞くと，自分の考えがふくらむ。」「みんなが自分の意見について考えてくれてうれしかった。」などを挙げていた。Ｓ児も，第２次の第３時では最初，

> わにのおじいさんは，おにの子を人間の子どもとかんちがいして，「人間だったら安心。」と思って，たから物のありかを教えたんだと思います。（Ｓ児）

と考えていたが，「夢を九つも見るくらい長く寝ていてもだれも声をかけてくれなかったけれど，おにの子だけが葉っぱのふとんをかけてくれるくらいやさしい。」という友だちの意見を聞いて，

> おにの子は心がやさしくて，まわりのみんなのことを考えてくれる子だとわかりました。わにのおじいさんの気持ちがおにの子にはわかるんだと思います。（Ｓ児）

のように，おにの子だからこそたから物をあげることにしたことに気づくことができていた。

また，授業後に「積極的に発表することができるようになった。」と答えた子どもが，23名から30名に増えた。友だちから学んだことを意識化させることによって，他者とともに学ぶことのよさを実感させることにつながったと考えられる。

(3) 読み取ったことをもとに続き物語を創作する

読むことの発展として，続き物語の創作を位置づけた（第３次）ところ，32名中27名が「続き物語づくりが楽しかった。」と答えている（複数回答あり）。その理由として，「最後が？で終わるから自分で新たなことを考えることが楽しい。」「自分たちでたから物が何かを決めることができる。」「みんなの物語を読むと，一人ひとりの考えが違って楽しい。」などを挙げていた。子どもたちがつくった続き物語のほとんどは，わにのおじいさんがおにの子のがんばりを称え，夕やけをたから物と認める展開になっていた。また，わにのおじいさんがたから物のありかを明かしても，子ども自身が納得する形の結末にして，物語を意味づけようとしていることがうかがえた。

5 おわりに

子どもたちがつくった続き物語には，一人ひとりのたから物についてのとらえが反映されていた。最初は物質的なものにとらわれていた子どもも，「自分で手に入れたもの」「他人には価値がなくても自分にとって大切なもの」「すぐそばにあるもの」「物ではなく目に見えないもの」などたから物についての考えをさまざまに深めることができていた。今後も，読むことを楽しみ物語の意味を見出すことにつながる授業をつくっていきたい。

＜引用・参考文献＞

1) 森田信義編：『初等国語科教育学』，協同出版，pp. 46-49，2002.
2) 住田勝：「文学作品の読みの能力の発達についての研究—〈つづき物語〉の分析を中心として—」，全国大学国語教育学会発表要旨集 98，pp. 14-17，2000.